

このアルバムについて

WINDS CAFE 主宰 川村龍俊

WINDS CAFE とは、1997年1月から、川村龍俊が私費を投じて会場を確保し、毎月1回、東京で、音楽を中心に美術演劇映画などさまざまなジャンルの方々に企画していただきながら続けている、イベント＋パーティーです。入場無料、出入り自由で、参加者のみなさまからは、パーティーでの飲食の差し入れを、また出演者への投げ銭を期待しております。

2020年5月24日(日)に、原宿のカーサ・モーツァルトにて開催を予定しておりました WINDS CAFE 281【ピアノリサイタルと室内楽リサイタルwithヴァイオリン ～古典から近代まで～】ですが、東京都における緊急事態措置等期間の5月31日までの延長決定により、残念ながら中止にせざるを得なくなりました。

しかし、企画・演奏者のピアニスト、宮阪優奈さんが、ヴァイオリニストの迫田圭君ともども、この日を目指して長期間に渡って練習を重ねてこられたことを鑑みるに、中止をこちらからお伝えするのは辛くてたまりません。で、一生懸命考えた結果、こういうことを思いつきました。

5月24日に、カーサ・モーツァルトで、準備した曲目によるセッション録音を行い、限定版CDを作成して、ご希望の方に配付しよう！ ……それが、このCDです。

● WINDS CAFE 281 on CD ●

【ピアノリサイタルと室内楽リサイタルwithヴァイオリン ～古典から近代まで～】

宮阪優奈（ピアノ）、迫田圭（ヴァイオリン）

2020年5月24日（日）午後2時録音開始 於カーサ・モーツァルト

▼川村からひとこと(事前告知文より)

宮阪優奈さんに初めてお目にかかったのは、2018年7月 WINDS CAFE 259【PLAY USTVOLSKAYA】に、企画の迫田圭君が共演者として連れてきてくれたときでした。

ウストヴォルスカヤは、想像以上にへんでこな曲でしたが(笑)、それを真剣に弾こうと取り組むお二人の姿が、なんか1960年代の実験音楽の実践に思えてきて、一瞬たりとも気を抜かずに聞いていました。

そしてびっくりしたのが宮阪嬢のピアノです。会場のカーサ・モーツァルトのピアノは、ある意味、良く鳴る大型のピアノとは違う音色の楽器(1920年代に制作後改修されたベヒシュタイン)なのに、とても上手に音を出していたと思いましたし、ウストヴォルスカヤでの思い切りの良さには、そうです、そう弾かなきゃと、勝手に声援を送っていました(笑)。

その日のうちに宮阪嬢に企画出演を依頼し、それが適うのが今回です。

まあ、本当に盛沢山なプログラム、それにブランクのソナタはさりげなく私がリクエストした曲でもありまして(笑)、もうわくわくしますね。

迫田君の WINDS CAFE 出演は、2016年 WINDS CAFE 239【家庭厳峻不容陸老従真門入・若い演奏家による木下正道作品展】以降、2018年 WINDS CAFE 253【津田宗明作曲個展「音楽のある風景」—声、ヴァイオリン、ピアノ—】、前述の WINDS CAFE 259【PLAY USTVOLSKAYA】とすでに3回を数えます。安定の(?)力量と音色ですばらしい時間を作ってくれることでしょう。

どうぞお楽しみに。

#### ▼宮阪優奈さんからの手紙(事前告知文より)

皆様、こんにちは。WINDS CAFE 281 in 原宿に出演させて頂きます宮阪優奈と申します。

演奏をさせて頂ける事、とても嬉しいです。この場をお借りして御礼申し上げます。

前回は2018年の7月に、ヴァイオリニストの迫田圭さんの【PLAY USTVOLSKAYA】に出演させて頂き、今回が2回目の出演となります。

5月24日の WINDS CAFE は、前半が私のピアノソロプログラム、後半は前回一緒にさせて頂いたヴァイオリニストの迫田圭さんをお迎えし、室内楽プログラムとさせて頂きました。

テーマは「挑戦と温もり」です。

長い間弾きたいと思っていた魅力的な作品を詰め込んだ結果、とても濃厚なプログラムになりました。後半のヴァイオリンソナタ2曲は特に、お楽しみになって頂きたいです。

皆様に音楽で幸せをお届けできますよう、引き続き準備をして参りたいと思います。

### ●宮阪優奈（みやさか・ゆうな）●

北海道出身。東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業、東京音楽大学大学院修士課程鍵盤楽器研究領域(伴奏)を首席で修了。N響のそうか土曜クラシック、恵比寿 WE LOVE MUSIC inc salon.コンサート、北広島市芸術文化ホールロビーコンサート等ソロ・室内楽において多数の演奏会に出演する他、アンサンブルピアニストとしても各方面から多くの信頼を寄せられている。万里の長城杯国際音楽コンクール、日本演奏家コンクールにて伴奏者賞を受賞。全日本学生音楽コンクール北海道大会本選にて過去3度入賞、第22回鳥栖フッペルピアノコンクールフッペル部門(大学・一般部門)本選入選等、数々のコンクールにて受賞。また、フランスにてMusicAlp 夏季国際音楽アカデミー・ティーニュを受講。受講生選抜演奏会に出演。これまでにピアノを佐藤睦美、北島公彦、橋高昌男、植田克己、佐藤俊、石井克典、村田理夏子、パスカル・ドゥヴァイヨンの各氏に、伴奏法・室内楽を山洞智、土田英介、門脇大樹の各氏に師事。イタリアにてレオニード・マルガリウス氏から薫陶を受ける。東京音楽大学ピアノ伴奏非常勤研究員を経て、現在、同大学付属幼稚園ピアノ教員。  
<https://twitter.com/yunamiyasaka>

### ●迫田圭（さこだ・けい）●

東京音楽大学大学院に給費奨学金を得て入学、修了。東京音楽大学コンクール入選、第28回市川市新人演奏家コンクール弦楽器部門最優秀賞。ロリエ弦楽四重奏団としてプロジェクトQ第10章に参加。若手作曲家の新作初演にも数多く携わっており、サントリーサマーフェスティバル内の芥川作曲賞選考演奏会ではソリストを務める等、精力的に活動している。現在、おーけすとら・ぴとれ座コンサートマスター。オーケストラトリプティークメンバー。Malus Quintetメンバー。green room playersメンバー。

WINDS CAFE <http://tatsutoshi.my.coocan.jp/Up.html>

カーサ・モーツァルト <https://casamoz.org/index.html>

## このプログラムにける思い

宮阪優奈

モーツァルトのピアノソナタ第8番イ短調は、私がまだ中学生の時、恩師がリサイタルの最初に演奏されていた曲でした。

中学生ながら、先生のような音色から生み出されるモーツァルトのピュアな音楽と短調ソナタの威厳に感動したのを今でも鮮明に覚えています。

あの日の体験は、先生のような音色を目指したいと今でも思い続けているきっかけとなった出来事です。

ラヴェルのソナチネは、ラヴェルを勉強する上では欠かせない作品なのですが、私は色々な事情でこの曲を後回しにしてしまっており、他の作品を先に勉強していました。いつか時間を作ってこの曲を勉強したいという思いを長い間持って過ごしていたのですが、コロナウイルスで色々なものがキャンセルになった時間を有効にと思い、勉強を始めました。

もともとこの演奏会では弾く予定にはしていなかったのですが、あまりにも曲が魅力的なので、この思いの詰まった WINDS CAFE のステージでは是非演奏したいと思い、急遽プログラムに入れました。

私が大学1年生の頃、大学の恩師が学内で行われたコンサートでショパンのスケルツォ第4番ホ長調が演奏されていて、あまりの美しさと確信を持った演奏に衝撃を受けたという出来事がありました。帰りの夜道が明るく感じたのを今でもはっきりと覚えています。

大学2年生になってから勉強をせずと寝かせていた曲なのですが、今回皆様にも是非聴いて頂きたく弾かせて頂くことにしました。スケールが長く続くので、集中力とテクニックの戦いをしながら、曲の美しさを壊さないで弾く事がこの曲の難しさであり魅力だと私は思います。

ブーランクのヴァイオリンソナタにいつかチャレンジしたいと思っていました。WINDS CAFE 主宰の川村さんにリクエストを頂き、弾かせて頂くことにしました。

ヴァイオリンは、いつもお世話になっており尊敬するヴァイオリニストである迫田圭さんにお願いで、実現する事ができました。迫田さんはどんな曲でも見事に弾き切ってくださいるので、安心して演奏できます。

ブーランクは、木管楽器とのソナタ・六重奏曲・2台ピアノの為のソナタ・2台ピアノの為の協奏曲と、色々な作品を勉強してきましたが、和声が独特でどの曲にもブーランク色というものがあると私は思います。また休符の使い方が面白く、作品に自然と作曲家の特徴が現れているので、このヴァイオリンソナタを通してブーランクを堪能して頂けたら幸いです。

ヴァイオリンとピアノのソナタの中で最難関と言われる大曲、シュトラウスのヴァイオリンソナタ変ホ長調に、いつか挑戦したいと思っていました。シュトラウスが後に書く交響詩・オペラでの歌心はここから来ているのかと思える程の「歌」に溢れていて、とても魅力的な作品です。ただ演奏するのが本当に難しいのです……。

演奏家として裏話を見せる事は普段は絶対にしないのですが、このCD録音の付属として演奏者の立場からの吐露を書かせて頂きました(笑)。

ただ、苦勞の先に見えるのは「何よりも輝く光」です。その光を皆様にお届けできますよう、迫田さんのお力をお借りして、精一杯取り組んで参ります。

WINDS CAFE 主宰の川村様に、アンコール曲としてフィビフの詩曲をリクエスト頂きました。フィビフは小学4年生の時に「ロレッタ教会の鐘」という曲をコンクールで弾いたことがあります。左手で奏でる和声がどんどん展開していくため、小学生の経験値と頭では、本番で冷静に弾くという事がとても難しかったです。

……そんな過去もありますが、17年ぶりのフィビフの作品です。とても美しい作品なので、是非コーヒーを一杯飲みながらでもお聴き頂けたら幸いです。

巷でよく、そのジャンルの名作を3つ選ぶ等という企画がよくあるが、ヴァイオリンソナタというジャンルにおいて名作を3つ挙げろと言われると、それは至難の技だ。何しろ曲数が多すぎるのだ。ピアノソナタを除くと、断トツで多いのがこのヴァイオリンソナタという編成だ。

私は音楽大学の学生の頃、このヴァイオリンソナタというジャンルの虜であった。大学の図書館に出向き、片っ端から楽譜を借りては友人と初見で演奏してみる。それでは飽き足らず、他大学の図書館にも侵入して、そこの知り合いに楽譜を借りてもらったり、挙げ句の果てには聞いたことも無い作曲家の聴いたことも無い作品を楽譜屋の一覧表から見つけ出して、海外から取り寄せてもらったこともあった。

何故こんなに躍起になって探しまくったのか、今考えると謎だ。恐らく楽譜を手に入れて、ヴァイオリンとピアノが一人ずつ揃えば音楽になる、その手軽さが良かったのだろう。飽きっぽい性格も相まって、一度音を出してみると興味は次の作品へと、とにかく回転が早かったが、その結果多くのヴァイオリンソナタに触れることができたのはよかった。

そんな生活を数年も続けていると、そろそろネタも尽きてくるものである。そうなるといよいよ次は自分で書いてやろうかという思考になるのだが、これが意外と難しい。手軽に弾けるからつくるのも簡単だろうと思っていたが、これは大きな間違いであった。どうもうまくいかない。だが何がうまくいかないのかもわからない。そんなこんなで数曲書いてみたものの、ヴァイオリンとピアノという楽器は実は相性が悪いのではないかという結論に至っただけだった。それ以来、しばらくヴァイオリン+ピアノという編成で作曲することは極力避けていた。

前置きが長くなってしまったが、本作品に収録されたリヒャルト・シュトラウスのヴァイオリンソナタとの出会いについて書いていきたい。

この作品との出会いは確か大学1年生の頃。先程話題となった楽譜漁りをするそのもつと前にCD漁りをしていた頃だ。ふと学内で検索をしているとヤッシャ・ハイフェッツ「ラストリサイタ

ル」の文字が。思わず手に取り、ワクワクしながら持ち帰って再生した1枚目のCD最後に収録されていたのが、このソナタであった。掴みから圧倒され、それからはずっとこの曲はお気に入り再生リストに入っている。

プーランクとの出会いは鮮明に覚えている。それは私のヴァイオリンの師匠のリサイタルでのことだった。当時、全くの無知であった私は、プログラムを見てプーランク？ フランクの偽物か？ などと今考えたらとても失礼なことを友人とまくし立てながら開演を待っていた。まあ知らない曲だし寝るかと思きもなく座っていたが、演奏が終わったあとにはすっかりこの曲の虜になってしまった。それからはプーランクという作曲家にすっかり夢中になり、オーケストラ作品から室内楽作品までとにかく聴き漁ったのはいうまでもない。

これら2つのヴァイオリンソナタには、特に関連が無さそうだと思うかもしれない。だがこの2作品にはある一点において、他の作品にはあまりみられない特徴がある。それは中間楽章への思い入れの半端なさだ。緩徐楽章ともいわれる第2楽章にここまで注力されて書かれた作品というのは極めて稀である。

プーランクのソナタでは、凶弾に倒れた詩人ガルシア・ロルカを想い、独創的な世界観を創っている。シュトラウスのソナタでは、偉大な作曲家の名作をモチーフに、壮大な作品に仕上げている。調性から曲の展開、メロディーラインに至るまで、非常に綿密に原曲を分解して使いながら作曲してある。曲の締めくくりに微かに原曲が顔を覗かせるどころなど、聴く者をこっそりと楽しませてくれることも忘れていない。

たらたらと駄文を連ねてみたが、結局私は3大ヴァイオリンソナタは選べない。だが5大ヴァイオリンソナタまで拡大したのなら、この2作品は間違いなくリストアップされるだろう。残りの3作品が何かと言われるかもしれないが、それはまた何かしら機会をいただけたときに取り上げたい。

このような時期に機会をくださった WINDS CAFE 主宰の川村さんをはじめ、場所を提供してくださったカーサ・モーツァルトさん他、ご賛同いただいた全ての皆様には感謝しても感謝しきれません。この場をお借りして、企画に関わっている全ての方々へ感謝申し上げます。

モーツァルト：ピアノソナタ第8番イ短調K. 310 (1778)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)はウィーン古典派を代表する作曲家の一人であり、決して長くはない生涯の中でピアノ曲・声楽曲・オペラ・室内楽曲等500曲以上の作品を残した非常に多作の作曲家である。

その中でも代表的な作品であるピアノソナタは全18曲あるが、18曲の中での短調作品はたったの2曲であり、本作品はそのうちの一つである。1778年夏頃、パリ滞在中に書かれた。同時期にはトルコ行進曲付きの有名なソナタも書かれている。

モーツァルトが書いたどのピアノソナタを見ても第一楽章の始めに Allegro, Adagio 等の速度表記がされているが、このK.310には Allegro maestoso と性格を強く表す maestoso(威厳をもって)という表記がされている事に、彼のこの曲への覚悟と思いを読み取る事ができるのではないだろうか。

この曲のように、威厳をもった和音が刻まれる上に主題が奏でられ曲が始まるという事も今までのピアノソナタに例がなく、短調という点も含め違う試みをしている事も間違いなく伺える。鍵盤楽器の特性を可能な限り活かし、感情の起伏とともに曲が展開していくオペラ作品のような劇的なソナタである。

第一楽章 Allegro maestoso

第二楽章 Andante cantabile con espressione

第三楽章 Presto

## ラヴェル：ソナチネ（1903-1905）

モーリス・ラヴェル(1875-1937)は、スイス人の父とバスク人の母の間に産まれたフランス音楽を代表する近現代の作曲家である。

幼い頃からピアノと話声を習い、僅か14歳でパリ国立高等音楽院ピアノ予備科に入学した彼は、1893年に初めての作品(歌曲「恋に死せる王女のためのバラード」、ピアノのためのグロテスクなセレナード)を書き、作曲家としての人生も歩み始めた。

約10年後の1903年(当時28歳)、ソナチネの第一楽章が完成、2年後に全楽章を完成させた。同年にピアノ曲「鏡」、1901年には「水の戯れ」が完成され、同時期に作風の異なる其々の作品に着手していた事になる。

「ソナチネ」は作品名の通り「古典形式」を用いて簡潔にまとめられたのだが、ラヴェル特有の色彩がふんだんに散りばめられており、ラヴェルにしか書くことのできない「ソナチネ」が完成された。優しく流れる旋律と輝きを持つ16分音符が寄り添う第一楽章、懐かしさも窺える少し寂しげな第二楽章、万華鏡のように次から次へと色彩が展開する第三楽章……、魅力が凝縮された作品である。

第一楽章 Modéré

第二楽章 Mouvement de Menuet

第三楽章 Animé

## ショパン：スケルツォ第4番ホ長調op. 54（1842）

フレデリック・フランソワ・ショパン(1810-1849)はピアニストでもあり、ピアノ作品を中心に作曲した、ポーランド生まれのロマン派の作曲家である。

1828年に初めて国外へ赴き、オペラを聴いたり、メンデルスゾーンやリストといった著名な作曲家とも交流があった事は、少なからず彼の音楽人生に影響があったのであろう。

数多くの傑作を残したショパン、スケルツォはその中でも代表的な作品であり、現在も多く音楽家から愛されている事は間違いない。

スケルツォ第4番ホ長調op.54は、1842年に作曲された。「スケルツォ」とは元々「きまぐれに」という意味を持つ(ベートーヴェンのピアノソナタにも変化をつける一つの楽章としてスケルツォが取り入れられ、曲を彩った)。

既に結核を患っていたとは思えないほど、作品には喜びと遊び心が溢れており、軽快なスケールと中間部に出てくるメランコリックな歌がとても魅力的な作品である。

様々な人生経験を経たショパンの思考と精神、作品への理想が、自然と反映されているかと思えてしまう程の傑作である。スケルツォ全4曲の終曲に相応しく、華やかに曲を閉じる。

## プーランク：ヴァイオリンソナタ（1942-1943）

フランシス・プーランク(1899-1963)は、ピアノを含む室内楽曲、声楽曲を数多く残している、フランスの近現代作曲家である。

しかし、彼は独奏ヴァイオリンを好まず、ヴァイオリンという楽器に苦手意識を持っていたのだが、1942年9月、ヴァイオリニストであるジネット・ヌグーの依頼によってこの作品は書き始められ1943年に完成した。

プーランクが残した弦楽器の作品は非常に少ないため、ヴァイオリンソナタはとても貴重な作品であり、また傑作として現代に深く知れ渡っている。

この作品は、スペインの詩人でスペイン内戦の犠牲となり殺害されたガルシア・ロルカの思い出に捧げられており、元々彼自身がガルシア・ロルカの思い出に作品を書きたいと思っていた事もあり、第二楽章冒頭にはロルカの詩の一行が引用され記されている。

La guitare fait pleurer les songes（ギターは夢に泣かせる）

第二楽章、第三楽章を書き終えてから、敢えて性格のはっきりとした第一楽章を目指して書き始めたと言われており、書いた順番も非常に面白い。彼がロルカへの思いを馳せた第二楽章が、この曲の鍵なのかもしれない。

ブーランクの人間的な感情、罪なき人物(ロルカ)が殺されなければいけなかった事への強い怒りが曲を通してストレートに表現されていると読み取る事ができる。

第一楽章 Allegro con fuoco

第二楽章 Intermezzo Très lent et calme

第三楽章 Presto Tragico

## リヒャルト・シュトラウス：ヴァイオリンソナタ変ホ長調op. 18 (1887-1888)

リヒャルト・シュトラウス(1864-1949)は、ホルン奏者で作曲家でもある父フランツ・シュトラウスの息子としてドイツで生まれた。後期ロマン派の代表的な作曲家である。

作曲人生の後期には誰も知っている衝撃的なオペラ「サロメ」「ばらの騎士」、交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」等を作曲。偉大な交響詩・オペラ作曲家として名を残した。

このヴァイオリンソナタは1887年、23歳の時に作曲された彼唯一のヴァイオリンソナタである。非常に規模が大きく、情熱的な作品であり、この頃から既に交響詩・オペラ作曲家としての表現を見出している事が窺える。

あくまでも「古典的形式」で且つ彼の持つ幅広い感性によって書かれており、作曲人生の前期を締めくくる一大曲として位置付ける事も出来るであろう。

三楽章構成で、堂々たる歌いを魅せる第一楽章、「即興的」と書かれた第二楽章では、優しさと虚しさ、官能性が見え隠れするロマンティックなスタイルを魅せ、そして第三楽章ではど

ん底の闇を思わせせたかと思えば一変してファンファーレのような華やかさをもって雄弁に奏でられ、すっきりと曲を閉じる。

ヴァイオリニスト・ピアニスト共に超絶技巧が必要とされ、この2つの楽器のソナタの中では最も難しいデュオ作品なのではないだろうか。

第一楽章 Allegro, ma non troppo

第二楽章 "Improvisation" Andante cantabile

第三楽章 Finale Andante-Allegro

## フィビフ：詩曲 op. 41-139 (1892) / ヤン・クペリーク 編曲 (1909)

ズデニェク・フィビフ(日本ではフィビヒと表記されることが多い)(1850-1900)は、当時オーストリア帝国の支配下であったチェコに生まれた。

この曲は元々ピアノ独奏のために書かれた小曲集「気分・印象・思い出」op.41の中の第4集「思い出」の第14曲で、「ジョフィーン島の夕べ」の副題を持っている。

ジョフィーン島は18歳年下の教え子アネシュカ・シュルツォヴァーの住まいのあったヴルタヴァ(モルダウ)川の島で、フィビフはここで、50歳で急逝するまでのほぼ10年間親密な関係となったアネシュカとともに見た美しい黄昏を甘い旋律で綴った。

後に、ヴァイオリニストのヤン・クペリーク(指揮者として著名なラファエル・クペリークの父。日本ではクーペリックと表記されることが多い)によって、ヴァイオリンとピアノのための「詩曲」に編曲され、フィビフの遺した曲の中で最も有名になった。

ゆったりとした美しい旋律の中に強い意志が見え隠れし、拍単位で展開する和声も非常に魅力的に書かれている。最後まで穏やかに進行し、静かに曲を閉じる。